

ダニエル7章9－14章「天からの支配」

1A 天の御座 9－10

1B 御座の輝き 9

2B 使いたちの礼拝 10

2A 獣の滅び 11－12

1B 大言壮語する角 11

2B 主権の奪われる残りの獣 12

3A 人の子の即位 13－14

1B 天の雲に乗る方 13

2B 永遠の御国の付与 14

本文

私たちのダニエル書の学びは、7章9節からになります。私たちは、大海から四頭の獣が出てきた幻をダニエルが見ているところを読み始めました。

第一の獣が獅子のようであり、翼を持っていました。その翼は抜き取られ、人のように立ちました。これはバビロン帝国を表していました。第二の獣は熊のようであり、横向きに寝ていて、起き上がって多くの肉を食らいます。バビロンをも喰らって大きくなっている帝国、メディア・ペルシアです。第三の獣は豹のようであり、しかも翼を持っています。なので、非常に敏速に走ることができます。驚くのはこの豹は、四つの頭を持っていて四つの翼を持っていることです。これは、ギリシア帝国を表していました。アレクサンドロス大王が、10年足らずでマケドニアから南はエジプト、東はインドにまで征服したのです。彼が若くして死んだので、その後には総督四人がこの広大な帝国を分割しました。

そして第四の獣が、この世に生きている猛獣をしても表現できない、恐ろしくて不気味な姿をして、非常に強かったです。鉄の牙を持っていて、食らってかみ砕いています。残りの獣は、この獣に踏みつけられています。そして、十本の角を持っているのが大きな特徴です。この獣はローマ帝国を表していますが、これまでの帝国とは一段と異なる、次元の異なる、地中海を囲む大帝国になったことです。そして、実に千年以上もの長い間治める帝国となったのです。

そして、この第四の獣はさらに、終わりの日の幻へと移ります。それは、小さな角がその十本の角の間から生えたことです。8節を読みます、「⁸私⁸がその角を注意深く見ていると、なんと、その間から、もう一本の小さな角が出て来て、その角のために、初めの角のうち三本が引き抜かれた。よく見ると、この角には人間の目のような目があり、大言壮語する口があった。」この角は、何でもな

い人であるところから、口がうまく、巧言によって力を得ます。そして、十本の角は、世界における十の王国であります、そのうちの三つを引き倒します。ですから、残りの七つの国よりも大きくなり、他の七人の王は彼に主権を引き渡します。それで、世界帝国の支配者となり、神を冒瀆する者となるのです。これが反キリストであり、黙示録 13 章にその国の姿が描かれています。

このように、世界は最悪の事態に陥ります。お先真っ暗、のようになってしまいます。しかし、聖書は、そういう時にも、明らかにはっきりと、光の中におられる神が支配しておられることを示していますね。ヤコブが、エサウに殺意を抱かれているのを知って、父の家から出て行って、夜に一人、石を枕にして寝ていたところ、天からの梯子の夢を見て、その上を御使いが上り下りして、主の使いが、今まで以上に、アブラハムとイサクに対する祝福の約束をはっきりと伝えました。ユダの国が罪と不正の中に陥っている時に、そしてウ ज्या王が死んだ時に、イザヤに、ご自分の御座、キリストの御座の栄光をお見せになりました。

そしてイエス様が、ご自身が十字架に付けられることをはっきりと、ピリポ・カイサリアで告げられました。その後、ペテロとヤコブとヨハネを高い山に連れて行きます。そして、そこで顔が太陽のように、衣が光のように輝き、御姿を変えられ、そこに、光り輝く雲が弟子たちをおおって、雲の中から、「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。彼の言うこと聞け」という声がしたのです(マタイ 17:5)。

闇が覆って、支配しているところで、実は神が天から支配しておられて、その闇を打ち滅ぼされるという、神の勝利があるのです。パウロが、コロサイの人々にこう語ったことを思い出します。「コロ 3:1 こういって、あなたがたはキリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。2 上にあるものを思いなさい。地にあるものを思ってはなりません。」今、小さな角が大言壮語するという幻になっているところで、神はダニエルに、天を仰ぎ見させ、ご自身の御座をお見せになるのです。

1A 天の御座 9-10

1B 御座の輝き 9

⁹ 私が見ていると、やがていくつかの御座が備えられ、『年を経た方』が座に着かれた。その衣は雪のように白く、髪は混じりけのない羊の毛のよう。御座は火の炎、その車輪は燃える火で、^{10a} 火の流れがこの方の前から出ている。

なんと、神ご自身が、「年を経た方」として、人の姿のような格好で登場しておられます。神は霊ですから見る事が出来ず、形もありませんから、これはあくまでも、神ご自身のご性質を表す幻です。年を経ているとは、永遠の生きておられる方、ということです。天地は過ぎ去ります。悪魔の試合する獣の国も一時的です。世の有様は過ぎ去るけれども、神が御座に着いておられることは

永遠に変わらないのです。そして私たちはこの神から新しい命を得て、この方によって、よみがえります。神のみこころを行う者は、世と世の欲が過ぎ去っても生きながらえるのです(Iヨハ 2:27)。

この方が玉座に着かれました。そして、「やがていくつかの御座が備えられ」とありますね。いくつかの御座とありますが、御座という敬語を使うべきなのか？と思います。ここの箇所は、黙示録 4章に出てくる、神の御座の幻と重なるものです。「黙 4:2-4 たちまち私は御霊に捕らえられた。すると見よ。天に御座があり、その御座に着いている方がおられた。3 その方は碧玉や赤めのうのように見え、御座の周りには、エメラルドのように見える虹があった。4 また、御座の周りには二十四の座があった。これらの座には、白い衣をまとい、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老たちが座っていた。」二十四人の長老たちの座が、御座の周りにあります。これから、これらの長老たちの真ん中に、屠られた姿の子羊が出てきます。そして、この方が御座の方から巻物を受け取られると、彼らは子羊の前にひれ伏します。彼らは、神が子羊キリストに世界の権利書を、表す巻物を受け取る時、その証人として立っている長老たちです。

そして、衣が白く、頭髪も混じりけのない羊の毛のようであるとあります。これは、神の聖い姿を示しています。先ほど話した、イザヤの見た御座の幻にも、主の御座から出ている衣があって、その裾が神殿に満ち、それから、セラフィムが呼び交わしています。「6:3 聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ちる。」聖なる方です。イエスご自身も、高い山で白い衣に御姿が変わりました。それから、黙示録 1 章、ヨハネがパトモス島で見た、栄光の姿に輝くイエス様は、まさに、年を経た方に似ています。「その頭と髪は白い羊毛のように、また雪のように白く(1:14)」そして、驚くべきことは、私たちが神の恵みによって、キリストの流された血によって、自分の罪が緋のように赤くても、雪のように白くしてくださり、紅のように赤くても、羊の毛のようにしてくださることです(イザヤ 1:18)。そして、天において、キリストの花嫁として婚姻にあずかる時には、真っ白い衣、「輝きよい亜麻布」をまとっています(19:8)。

神は、罪や汚れから全く離れた聖い方なので、そこから必然的に出てくるのは「火」です。火は、不純物を清める火であり、また不義を燃やし尽くす裁きの火でもあります。預言者エゼキエルも、天にある御座を預言を語る前に、幻として示されています。火によって輝いている、ケルビムの姿から始まります。ケルビムは車輪を持っており、その上には大空が広がっていました。さらにその上に、サファイアのように見える王座があり、「その王座に似たもののはるか上には、人間の姿に似たものがあつた。」とあるのです(1:26)。主の御座の姿です。そして、こう続きます。「エゼ 1:27 私が見ると、その腰と見えるところから上の方は、その中と周りが琥珀のきらめきのように輝き、火のように見えた。腰と見えるところから下の方に、私は火のようなものを見た。その方の周りには輝きがあつた。」火が現れているのです。

元々、イスラエルの民にとって、聖なる神の姿は自分たちの原体験であります。シナイ山のこと

を思い出してください。天から神が降りて来られたら、「出 19:18 シナイ山は全山が煙っていた。主が火の中であって、山の上に降りて来られたからである。」したがってバプテスマのヨハネは、ユダヤ人たちに対して悔い改めを説き、イエスが聖霊と火のバプテスマを授けられるけれども、清め、また悔い改めない者どもを焼き尽くすことを語ったのです(マタ 3:12)。ですから、これからすぐに出てきますが、この小さな角を持つ獣は、聖なる神の前で火によって燃やされる裁きを受けます。

2B 使いたちの礼拝 10

^{10b} 幾千もの者がこの方に仕え、幾万もの者がその前に立っていた。さばきが始まり、いくつかの文書が開かれた。

天において、神に仕える使いたち、天使たちが無数にいます。ヘブル人への手紙の著者は、私たちキリスト者の近づいているのは、シナイ山における恐ろしい姿ではなく、「シオンの山、生ける神の都である天上のエルサレム、無数の御使いたちの喜びの集い」と言っています(12:22)。悔い改める者が一人出てくるごとに、祝宴を開くような御使いの集いがあるのです！そして、黙示録 5 章で、天において子羊をほめたたえている無数の御使いの姿が出てきます。「11 また私は見た。そして御座と生き物と長老たちの周りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の数万倍、千の数千倍であった。12 彼らは大声で言った。「屠られた子羊は、力と富と知恵と勢いと誉れと栄光と賛美を受けるにふさわしい方です。』」

それから、さばきが始めるとあります。いくつかの文書が開かれるとあります。千年間のキリストの統治の後、天地が過ぎ去って、そこに白い大きな神の御座がありますが、そこで神が、陰府にいる者たちをよみがえらせ、一人ひとり裁かれます。その時に、「数々の書物が開かれた。」とあります(黙示 20:12)。そこに行いが書かれています。それと同じようにして、神は、小さな角を持つその獣を、その行ったことに応じて、ことごとく裁かれるのです。

このようにして、主は必ず、悪を行った者たちに対して裁きを行われ、その裁きは主イエスの地上への再臨の時に行われます。「Ⅱテサ 1:6-9 神にとって正しいこととは、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。8 主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に罰を与えられます。9 そのような者たちは、永遠の滅びという刑罰を受け、主の御前から、そして、その御力の栄光から退けられることとなります。』

2A 獣の滅び 11-12

1B 大言壮語する角 11

¹¹ そのとき、あの角が大言壮語する声でしたので、私は見続けた。すると、その獣は殺され、から

だは滅ぼされて、燃える火に投げ込まれた。

この大言壮語とは、神を冒瀆することです。人間中心主義のこの人物が、神の御名を汚しているのです。その最中に獣は殺されます。神は、速やかにそのようなことをしている者どもを裁かれます。ベルシャツアルも、神の宮の器でバビロンの神々を賛美しているその最中に、壁に人の指が現れ、裁かれました。そのようにして、反キリストもその冒瀆の真っ最中に、キリストご自身によって殺され、滅ぼされるのです。

その様子は克明に、黙示録 19 章の最後のところに出てきます。「19:20 しかし、獣は捕らえられた。また、獣の前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた者たちと、獣の像を拝む者たちを惑わした偽預言者も、獣とともに捕らえられた。この両者は生きたまま、硫黄の燃える火の池に投げ込まれた。」生きたまま投げ込まれたとあります。それほど速やかに殺され、滅ぼされたということでもあります。私たちは前回、どうしようもない、人間が御することのできない世の流れ、大きな国の動き、そして反キリストの現れであっても、全能者の前では、ものの見事に一瞬にして滅ぼされるのです。

2B 主権の奪われる残りの獣 12

¹² 残りの獣は主権を奪われたが、定まった時期と季節まで、そのいのちは延ばされた。

獅子、熊、豹が、第四の獣の前に現れていましたが、それらは第四の獣に踏みにじられている姿を先ほど見ました。この獣が滅んだので、その後解き放たれるのですが、もはや力は失っていて、主権はなく、一定の時期までいのちが延ばされているということです。

これは、ローマ帝国が過去の帝国のところを踏みにじりましたが、帝国としての主権はなくなったものの世の終わりまで続き、そして、王の王となられたキリストの裁きの時まで生き延びるということです。バビロンは、今のイラクとして生き残っています。ペルシアはイランとして生き残っています。ギリシアはそのままギリシアです。それぞれが帝国の栄光は過ぎ去っています。

そして、イエス様が戻って来られる時に、世界の諸国がこの方の前に集められます。「マタ 25:31-33 人の子は、その栄光を帯びてすべての御使いたちを伴って来るとき、その栄光の座に着きます。32 そして、すべての国の人々が御前に集められます。人の子は、羊飼いが羊をやぎからより分けるように彼らをより分け、33 羊を自分の右に、やぎを左に置きます。」そして、やぎのほうは、永遠の火に焼かれますが、羊は御国の中に入れられます。ですから、バビロン、ペルシア、ギリシアのところにいる人々は、この時にどちらかに入るか決められます。その時までには、いのちが延ばされます。

3A 人の子の即位 13-14

こうして私たちは、ダニエルの見た二つ幻を見ました。大海からの四頭の獣、次に年を経た方の御座と、獣が裁かれる姿です。そして次にダニエルは、驚くべき光景を見ます。

1B 天の雲に乗る方 13

¹³ 私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が 天の雲とともに来られた。その方は『年を経た方』のもとに進み、その前に導かれた。

年を経た方の御座だけでなく、なんと、そこに「人の子のような方が 天の雲とともに来られた」とあります。そうです、ここを読んでどこかの有名なことばを思い出せるのではないのでしょうか。イエス様が、大祭司カヤパの前で告白されたのがこれだったのです。「マタ 26:64 イエスは彼に言われた。「あなたが言ったとおりです。しかし、わたしはあなたがたに言います。あなたがたは今から後に、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります。」」そして、オリーブ山で弟子たちにご自身が戻って来られることを語られる時も、ここからのダニエルの預言を語っておられました。「マタ 24:30 そのとき、人の子のしるしが天に現れます。そのとき、地のすべての部族は胸をたたいて悲しみ、人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。」イエス様が、ここのダニエルの見た幻をご自身に当てはめたので、それでご自身がキリストで神の子であると告白しているため、カヤパが神への冒涇であるとして死刑宣言をしたのです。しかし、この方の場合は反キリストのような冒涇ではなく、事実、神の御子でした。

まず、「天の雲とともに来られた」とありますが、これは孫悟空のような移動の手段ではありません。雲というのは、神の栄光が濃厚にある時に使われます。天から神がシナイ山に降りて来られた時に、厚い雲と共に来られています(出エ 19:16)。そして、モーセが幕屋を立てた時、またソロモンが神殿を建てた時に、そこは栄光の雲に満ちて、中に入ることもできませんでした。

この方はこのように神の栄光に包まれる中において現れていますが、しかし、「人の子」であられます。この方に、主権と力、位が年を経た方から与えられますが、そのような王の王、主の主であられる方であると同時に、人の子、つまりただの人だという、しもべの姿を身にまといおられるのです。人の子という呼び名が使われる時は、何でもない者、人間の弱さを身にまといおられることを表しています。例えば、バラムが、神が人のようではないと預言した時にこう言いました。「民 23:19 神は人ではないから、偽りを言うことがない。人の子ではないから、悔いることがない。」

そして「人の子よ」と呼ばれ続けたのは、預言者エゼキエルです。神ではなく、単なる人ということで、呼び続けています。「エゼ 2:1 その方は私に言われた。「人の子よ、自分の足で立て。わたしがあなたに語る。」」ですから、その人の子が、天の雲と共に来られて、年を経た方のところに行くというのは、驚くべき光景であり、実にこれがキリストであることを示す預言なのです。当時のユダ

ヤ人は、メシアといえば王であり、力強い預言者としては思い描いても、単なる人であるというところには目を留めなかったのでしょうか。だから、イエス様を見誤ってしまいました。私たちも、へりくだったところにこそ主がおられることを見誤ってはいけません。

主は、ご自身がキリストであることを伝えはしましたが、人の子という呼び名を使って、しもべとしてのご自身の使命を語られました。福音書には数多く出てきますが、マルコ伝だけを取り上げて、またその一部だけを取り上げます。「2:10 しかし、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために——。」そう言って、中風の人に言われた。」「2:28 ですから、人の子は安息日にも主です。」「8:31 それからイエスは、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。」「8:38 だれでも、このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことばを恥じるなら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るとき、その人を恥じます。」「9:9 さて、山を下りながら、イエスは弟子たちに、人の子が死人の中からよみがえる時までには、今見たことをだれにも話してはならない、と命じられた。」「9:12 イエスは彼らに言われた。「エリヤがまず来て、すべてを立て直すのです。それではどうして、人の子について、多くの苦しみを受け、蔑まれると書いてあるのですか。」「10:33 ご覧なさい。わたしたちはエルサレムに上って行きます。そして、人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡されます。彼らは人の子を死刑に定め、異邦人に引き渡します。」「10:45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」「13:29 同じように、これらのことが起こるのを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていることを知りなさい。」「14:21 人の子は、自分について書かれているとおり、去って行きます。しかし、人の子を裏切るその人はわざわいです。そういう人は、生まれて来なければよかったのです。」「14:41 イエスは三度目に戻って来ると、彼らに言われた。「まだ眠って休んでいるのですか。もう十分です。時が来ました。見なさい。人の子は罪人たちの手に渡されます。」

2B 永遠の御国の付与 14

¹⁴この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。

イエス様は、ご自分が人の子として、しもべとして地上で父なる神の命令をすべて果たされました。そこで神は、この方を墓からよみがえらせて、天に引き上げ、ご自分の右の座に着かせました。そして今は、私たちのためにイエス様はそこから執り成しておられますが、立ち上がられて、ここで神から与えられている「主権と栄誉と国」を行使するために地上に戻られるのです。神の栄光の雲と共に王の王、主の主として戻って来られるのです。ダニエル 2 章で、ネブカドネツアル王が見た夢には、人の手によらずに切り出された石として、この様子が預言されていました。「2:44-45a この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされることがなく、そ

の国はほかの民に渡されず、反対にこれらの国々をことごとく打ち砕いて、滅ぼし尽くします。しかし、この国は永遠に続きます。45a それは、一つの石が人手によらずに山から切り出され、その石が鉄と青銅と粘土と銀と金を打ち砕いたのを、あなたをご覧になったとおりです。」

永遠に滅ぼされることのない神の国です。すべての民族、国民、言語の者たちがこの方に仕えます。主権は過ぎ去ることがありません。滅びることがありません。これまでの世界の諸帝国は必ず衰えと滅びを経験しました。そしてこれから出てくる、反キリストの帝国は、キリストご自身によって速やかに滅ぼされます。しかし、この国は永遠に滅びることはないのです。そして、ダニエル 7 章では続けて、この御国を聖徒たちが受け継ぐという希望が啓示されています。それは次回学びますが、私たちは、この国に入るために今、いろいろな困難を経ているのです。

ダニエル書で、ここまではっきりと天の御座の幻が出ている箇所はないです。聖書全体でも、御座の幻は、イザヤ、エゼキエル、そして黙示録などわずかです。しかし、ここから神が支配しておられて、どんな闇の中にも、天に神がおられることを告白できることが恵みです。詩篇 115 篇には、国々から私たちの神がどこにいるのかと嘲られる場面があります。ここを読んで終わりにしたいと思います。「115:2-8 なぜ国々は言うのか。「彼らの神はいったいどこにいるのか」と。3 私たちの神は天におられその望むところをことごとく行われる。4 彼らの偶像は銀や金。人の手のわざにすぎない。5 口があっても語れず目があっても見えない。6 耳があっても聞こえず鼻があっても嗅げない。7 手があってもさわれず足があっても歩けない。喉があっても声をたてることができない。8 これを造る者も信頼する者もみなこれと同じ。」目に見えるところに従えば、愚かに見えるかもしれません。しかし、目に見えないからこそ、この方が天におられて、ご自分の望まれることをことごとく行われていることを確信することができます。目に見えてしまえば、それは偶像です、見ることもできず、聞くこともできず、物を言わない神です。